

出版の冒険者たち。

かくひと

書人

「冒険者たち」という表題にこめた思いについて、著者は「出版が厳しいと言われている今だからこそ、萎縮しないで先人に学び、もっと冒険してはどうかと訴えたかった」と話す。

少しずつ会社を大きくしていることだ。「出版は昔から、机と電話が一台あればできると言われていたが、企画力で無から有を生み出す。そこに出版の醍醐味があると思う。みんな本をつくるのが好きで、それによって何か文化的なことに貢献したいという気持ちを持っていったんですね」

植田さんは一九六二年に三年から社長。戦後ベストセラーの歴史を追った『本は世につれ』、雑誌の興亡を描いた『雑誌は見ていた。』に続く本書は、現代の出版を読み解く三部作の完結編になる。

無から有を今こそ

面白いのは、敗戦のあと復員した田中治男が小学校の恩師の久保田忠夫を誘った四畳半の部屋を借りて創立したポプラ社をはじめ、ほとんどの創業者が裸一貫で出版を始め、苦労しながら

上智大学新聞学科を卒業して書評紙「週刊読書人」に入社。八九年からは母校の助教授・教授として出版論や雑誌論を講じ、日本出版学会の会長も務めた。二〇〇八年に読書人に戻り、一

りで成長した時期もあったけれど、長い目でみれば、これはむしろ例外で、出版はいつの時代もそう恵まれてはいなかった。だから、今の状況を悲観しても仕方がない。出版人としての志と熱意をもって何か新しいことを考えてほしい」

水曜社・三三六円。

(後藤喜一)

台北の故宮博物院に通い続けて迫真の復元を成し遂げ、収蔵書画の複製を自由に行うことを許された二玄社の渡邊隆男、留学先の中国から帰国したばかりの諸橋敏次に依頼し、数十年の歳月と莫大な資金をかけて『大漢和辞典』を完成させた大修館書店の鈴木一平、広告を取らない生活総合誌「暮しの手帖」の大橋鎮子と花森安治……。本書は個人的な経営で優れた業績を残した七つの出版社の創業者や会社の歩みを物語風に描き、出版が熱かった時代をよみがえらせた。

『出版の冒険者たち。』

出版ジャーナリスト 植田 康夫さん (76)



この出版人たちは「出版は道楽」と考えて質を高めることに心血を注ぎ、売れる本の出版に甘んじることなく「後世に残る良書の出版」を目指して奮闘する。